



吉野川市
徳島県

NPO法人TICO

徳島県吉野川市を拠点に、ザンビアをはじめ開発途上国で国際協力を展開するNGO。保健医療、農業、水、教育など包括的な支援に取り組む。2008年からはカンボジアでも活動を開始。国際協力を通じて学んだ経験や知識を日本の地域の人々と分かち合うため、県内でも講演会やイベントなどを積極的に開催。現在、ザンビアとカンボジアでJICA草の根技術協力事業を実施中。

環型社会を実現しよう

徳島県吉野川市にある、まちの小さな医療施設「さくら診療所」。医師不足が叫ばれるこの土地で、地域医療に貢献する傍ら、NPO法人TICOとしての国際協力活動に力を入れている。

〔徳島県〕

吉野川市



高齢化による人手不足で放置されている地元のゆず畑の復元を目指し、「わらびの会」と協働で、毎年秋にゆず狩りのイベントを実施。地域の人々に、「地域資源」や「食」を見直す機会を提供している。収穫したゆずの収益はTICOの活動に寄付されている

世界のために循環

4月の地球人カレッジは、カンボジアに赴任した古家聖子さんの活動報告。「医師としての役割を、改めて考えるきっかけになりました」。地球人カレッジは、毎回インターネットでもライブ配信されている



さくら診療所の施設は、太陽光発電や生ごみのコンポスト化など、徹底的に環境に配慮した造りになっている

吉田さんは自称「兼業農家」。診療所や自宅の食事で使う野菜を無農薬栽培している



以上に、助けられない人がたくさんいたのも確かです。心に残ったのは無力感。一つの土地に根差した協力がしたい。いつしかそう強く思うようになった。

そしてもう一つ、吉田さんがずっと感じていたこと。日本にも国際協力に関心のある医師はたくさんいる。しかし日本での仕事の不安もあり、その一歩が踏み出せない。そんな医師たちが、交替で国際協力に取り組める場所がつかれないだろうか。そんな思いから、1993年に誕生したのが「NPO法人TICO」※。99年には「さくら診療所」を開業し、協力隊時代の同期、福士庸二さんと協力しながら、さくら診療所の医師とTICOの代表、国内外で二足のわらじを履いている。

包括的な取り組みにより 貧困削減を目指す

TICOが設立当初から支援しているのが、かつてJICA専門家として赴任していたザンビア。長年、医師として国際協力に携わってきた吉田さんだが、「医療だけでは貧困問題の解決にはつながらない」と、他の分野の支援にも力を入れる。その根底にあるのが、2002〜03年の干ばつの教訓を経てたどり着いた、WAHEパッケージ。Water（水）、Agriculture（農業）、Health（健康）、Education（教育）に着目した包括的な農村開発だ。

さらに07年からは、JICAの草の根技術協力事業を通じて、首都ルサカから約100キロの所にあるチボンボ郡でプライマリー・ヘルスケアの支援をスタート。医療機関へのアクセスが悪いこの地域に簡易診療所を設立し、その運営を補助するコミュニティ・ヘルスワーカーの育成を通じて、地域医療の改善につなげることが目的だ。また08年からは、同じく四国を拠点とする公益社団法人セカンドハンドと協働で、カンボジアの首都プノンペンで救急システムの普及にも取り組む。

「途上国を支援するだけでなく、私たち自身も、地球に負担をかける生活を送っていないか、見直さなければなりません」

そう強調する吉田さんは、日本国内での啓発活動にも積極的だ。さくら診療所のスペースを使った「地球人カレッジ」もその一つ。月1回、国内外で活躍する国際協力の実務者を招き、地域の人々を対象に講演会を行う。また、医学生を対象にした「TICO道場」では、吉田さんの自宅に寝泊まりし、世界の問題について考えるワークショップや農作業などが経験できる。「一医師として、真の『健康』とは、人間にとって本当に大切なこととは何かに気付いてほしい」。そのほかにも、ザンビアの小物などを販売するバザーやチャリティウォークなど、大人から子どもまで、幅広い世代が参加できる。地

診療所を拠点にした 徳島発の国際協力

徳島県の北部、吉野川がはぐくむ豊かな自然の恩恵を受ける吉野川市。徳島駅から電車で揺られること約1時間、阿波山川駅の近くにちよつとユニークな診療所がある。まず目に入るのは、桜の木でできた大きな看板。吉野川上流のスギに囲まれた建物は、とても医療施設とは思えない、何とも温かな雰囲気を出している。院長を務めるのは、この土地で生まれ育った吉田修さん。白衣は身に着けない。親しみやすい、まちのお医者さんとして、地域の人々に慕われている。

実はこの吉田さん、もう一つの顔を持つ。アフリカ南部にあるザンビアを中心に国際協力に取り組むNPO法人TICOの代表でもあるのだ。

「地域医療と国際協力、実はつながっているんですよ」

吉田さんは今から約20年前、青年海外協力隊としてマラウイに赴任。「医師になって7年目、最初は往診に行くような感覚でした」と笑うが、現地では吉田さん以外に外科医はいない。来る日も来る日も手術の連続だった。あつという間の2年間、力の限りを尽くしたが、「後任の隊員がおらず、この後、彼らはどうなっていくんだろうと思った」と言う。帰国後もNGOに籍を置いて緊急医療支援に携わった。しかし、「たくさんの人を助けました。でもそれ

域ぐるみの国際協力を実践している。

現在、同じく診療所に勤める渡部豪さん（カンボジア事業担当）とローテーションを組み、TICOとの活動を両立させている吉田さん。吉田さんがザンビアに行く時には渡部さんが、逆に渡部さんがカンボジアに行く時には吉田さんが診療所の診察に当たる。「困っている人を助ける」という思いは、地域医療も国際協力も同じ。熱意ある若い医師を探しています。

最終的にTICOが目指しているのは、「循環型社会」の実現。「自然は人間の生活に必要なものを用意してくれています。持続可能な循環型社会をつくるため、自然の恵みをいかに守り活用していくか。世界が一体となり、考えなければなりません」。日本も途上国も、根本的に取り組むべき課題は同じ。吉田さん率いるTICOのメンバーは、そう強く感じている。



カンボジアの救急隊とともに、救急時の対応のシミュレーションを行う



ザンビアでは、地域の人々が主体となって農村開発に取り組めるような仕組みづくりを支援。「あくまで実務者は現地の人たち。私たちは黒子的存在です」